

## 名著を大いに語る

名著はなぜ時代と地域を越えて読み継がれるのだろうか。時代の転換期を迎える今だからこそ、もう一度ひもといてみたい。今回は、教育社会学、比較社会学を専門とするオックスフォード大学の荻谷剛彦教授に今後の「人と組織」を考えるうえで、役に立つ名著を語っていただく。



● 語り手

**荻谷剛彦氏**

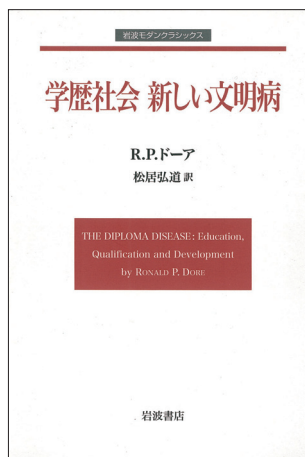
オックスフォード大学 社会学科  
現代日本研究所 教授

Kariya Takehiko\_東京大学教育学部卒業。1988年ノースウェスタン大学大学院博士課程修了。専攻は教育社会学、現代日本社会論。2009年9月まで東京大学教育学研究科教授。2008年よりオックスフォード大学教授を兼任。著書に『教育と平等』（中公新書）など。

### 『学歴社会 新しい文明病』

#### 雇用と教育の関係を比較した名著 学歴競争の意味を考える契機に

雇用と学校教育の結びつきを解明した名著である。日本研究を専門とするイギリスの社会学者の著者は、近代化の過程における日本、イギリス、後発国の学校教育の実態を分析。その比較を通して「後発効果」による学歴病の拡大を証明した。学歴病が日本特有の病弊でないとの指摘は注目を集め、1977年の初版以来、版を重ねる。



著者／R・P・ドーア 訳者／松居弘道  
岩波書店 3200円（税別）  
2008年10月刊行

近代化を急ぐ後発国ほど、就職のための学歴獲得競争は激しく、一種の病的症状を呈する。これが学歴病の病理であり、「後発効果理論」の柱である。

本書においてドーア氏は、学歴病の蔓延を危惧し、学校が人格形成という本来の教育機能を再生するための方策を提言した。しかし、初版から35年を経て、グローバル化という新たな変化に直面する我々は、氏の思惑とは異なる真実に気づく。近代から現代につながる時間軸と文化圏という空間軸に各国の学校教育の実態をプロットすることで、学歴獲得競争の合理性が見えてくるのだ。

#### 近代化への焦りと平等主義が 学歴競争を熱くする

ドーア氏は、イギリスと日本の比較から後発効果を実証した。

実は、イギリスの近代化において、学校教育は何の役割も果たし

ていない。発明好きの職人や工場に原動力を供給する水車小屋の“親父”など、個人の努力が技術の発展、ひいては経済的発展につながったのだ。そもそも、当時の学校は上流階級の文化伝達のみであり、目的は教養を身につけ人格を形成することだった。近代産業によって「雇用」という概念が生まれたために、弁護士や技師などの専門的な資格取得を目的とした学校教育が後付的に発展したのであり、近代化の始まりが学歴獲得競争につながることはなかった。

一方、イギリスより遅れて近代化に着手した日本は、先進国に早く追いつくために、雇用に直結する学校教育をそのまま輸入。技師や官吏などの職に就くためには一流大学の卒業証書が必要となった。また、武士階級の特権だった儒教的な教育を無にして、西洋文化の学校教育を始めたため、誰もが同じスタートラインに立つことがで

きた。近代産業部門への就職を目指し、多くの人々が学歴獲得競争に参加することになった。

### グローバルな学歴競争が始まる 日本企業も選抜基準の再考を

現在は、イギリスでも高学歴化が浸透し学歴獲得競争が過熱している。近代化の開始は早かったが進行は遅く、後発効果の影響が今頃出始めているのだ。しかも、グローバル人材の育成につながる高学歴化を国策として進めている。学歴獲得競争が、人的資本を高めるうえで合理的であることを、ほかの先進国の成功体験から学んだからだ。既にイギリスの大学はグローバルに広がる学歴競争に加わり、実力を競い合っている。

一方、近代化の成功体験にしがみつき、変化を拒んでいるのが今の日本だ。学歴の価値は入試偏差値の示すままで、国内だけで通用する学歴獲得競争を続けている。就職活動が教育を妨げ、大学で学んだ内容も問われない。半数以上の若者が進学するようになって、大学教育は新たな価値を生みず、社会的な損失は放置されたままだ。

人材育成のグローバルな競争が展開するなか、日本の企業も社会全体のコストを考え、人材育成と連動する採用を考える時期にきている。

## 研究員の書棚から

心理学のテーマから  
当研究所主任研究員の笠井恵美が紹介します。

### 『それでも人生に イエスと言う』

著者/V・E・フランクル  
訳者/山田邦男・松田美佳  
春秋社 1700円(税別) 1993年12月刊行



### 生きるとは、人生がそのときそのときに出す 具体的な問いに答えていくこと

この本は、ナチスの強制収容所体験をつづった『夜と霧』の著者として、また、実存分析\*を提唱した精神医学者として有名なフランクルが、強制収容所から解放された翌年に一般市民向けに行った3つの講演の記録です。

そもそも人生に、意味のある人生・意味のない人生というものがあるわけではないと、フランクルは言います。瞬間瞬間、人によって異なる「人生が出す問い」に答えていくことがすなわち生きるということであり、「人は、あなたを待つ仕事や家族の気持ち、といった具体的な問いに答えを出さなければならない存在である」と述べます。そのうえで、人生が出す問いへの応え方として、「なにかをすること」で応える、「愛すること」で応える、制約が非常に大きい状況の場合は、「どうふるまうか」「どう引き受けるか」という態度で応える、の3つをあげ、それによって人生を意味あるものにしていくことができると説明しています。

たとえば、ビジネスにおいて誰もが希望の仕事に就けるとは限りません。「この仕事はやる意味があるのか」と思うこともあるでしょう。しかし、フランクルの考えに従って、仕事にそもそも意味があるかどうかを問うのではなく、「その仕事をする中で、どのような問いに自分は応えようとしているのか」と考えを転換すると、新たな仕事の意味と価値が見えてくる可能性があります。

仕事の意味と生きる意味を考えられる1冊です。

Kasai Emi\_リクルートにて就職情報誌、人材マネジメント関連専門誌の編集・執筆などを経て、2003年より現職。職業における個人の成長や発達をテーマに調査や研究を行っている。

\*実存分析とは、人が自らの「生の意味」を見出すことを援助することで心の病を癒す心理療法のこと。